

国立障害者リハビリテーションセンター
「高次脳機能障害支援普及事業公開シンポジウム」
2013年2月22日(三田共用会議所) 配付資料2

感覚統合障害と身体症状 —本人調査から—

高橋 智

(東京学芸大学教授・日本特殊教育学会副理事長)

共同研究者: 田部 絢子 (Ayako TABE Ph.D.)

石川 衣紀 (Izumi ISHIKAWA Ph.D.)

はじめに

- 近年、自閉症スペクトラムを有する方々の**感覚統合障害**の問題が明らかとなりつつある。
- アスペルガー症候群当事者のニキ・リンコは「**自閉症は身体障害である**」として、例えばひと月のうち半分は発熱する、疲労感に気づきにくく倒れるまで頑張ってしまうといった**身体症状(身体の不調・不具合)**について述べている(ニキ・藤家:2004)。
- その他の当事者も「しゅっちゅう耳や扁桃腺を腫らしては、そのたびに屋根裏に押しこめられることになった」(ローソン:2001)、「陽の照っている表へ出て、吐き気に襲われる」(トーマス:2003)、「慣れない場所への外出を考えただけで体調を崩す(リアン:2002)」などの**症状を訴えており、こうした発達障害者の身体症状(身体の不調・不具合)は多岐にわたる。**

はじめに

- 発達障害の本人・当事者の抱える困難は理解されにくく、求めている支援ニーズも適切に対処されないことが多い。
- 当事者の手記に見られるような**感覚統合障害**(高橋・増淵:2008、岩永・藤家・ニキ:2008、岩永:2010)や**身体の不調・不具合などの身体症状**にも目を向けていく必要がある。

目的

- 本報告では、**高次脳機能障害とも重なるの多い発達障害の当事者**がどのような**感覚統合障害**や**身体症状**を抱えているのかについて明らかにする。

方法

- (1) **質問紙調査票**: 刊行されている発達障害者本人の手記をほぼ全て検討し、どのような身体の不調・不具合などの身体症状があるのかを把握し、それらをもとに質問紙調査票「**発達障害者の身体の不調・不具合などの身体症状に関するチェックリスト**」全665項目を作成。
- (2) **調査内容**: 身体の不調・不具合などの身体症状(頭と心、目・耳・鼻・口腔、呼吸器、循環器、消化器、泌尿器と女性性器、皮膚、運動器、その他の病気、その他)に関する調査。

- (3) **調査対象**: 発達障害(アスペルガー症候群、高機能自閉症、その他の広汎性発達障害、LD、ADHD、軽度の知的障害)の診断・判定を有するあるいはその疑いのある、そして**発達障害についての認識・理解を有する高校生以上の当事者であり、自身の身体の不調・不具合などの身体症状について振り返って記述が可能な方**を対象に質問紙調査を実施する。
- 東京学芸大学の学部・大学院に在学して発達障害教育の講義を受講している学生にも同様の質問紙調査を行い、結果を比較・検討する。
- (4) **調査期間**: 2009年12月～2010年1月。**発達障害の本人62名**、東京学芸大学の学部・大学院に在学して発達障害教育の講義を受講している学生93名から回答を得た。

表1 発達障害本人の障害名内訳（人）複数回答n=62

診断・判定名	人数
アスペルガー症候群	20
高機能自閉症	5
その他の広汎性発達障害	23
LD	4
ADHD	6
知的障害	22
診断・判定なし	4

※「その他の広汎性発達障害」と「知的障害」に1名ずつ、正式な診断・判定は有していない方を含んでいる。

チェック率の全体傾向

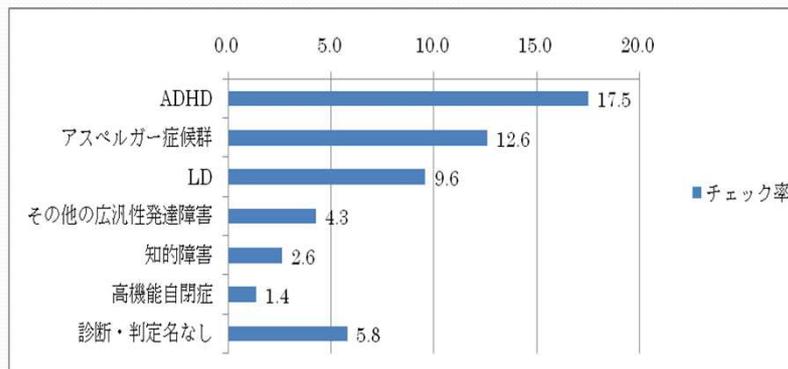
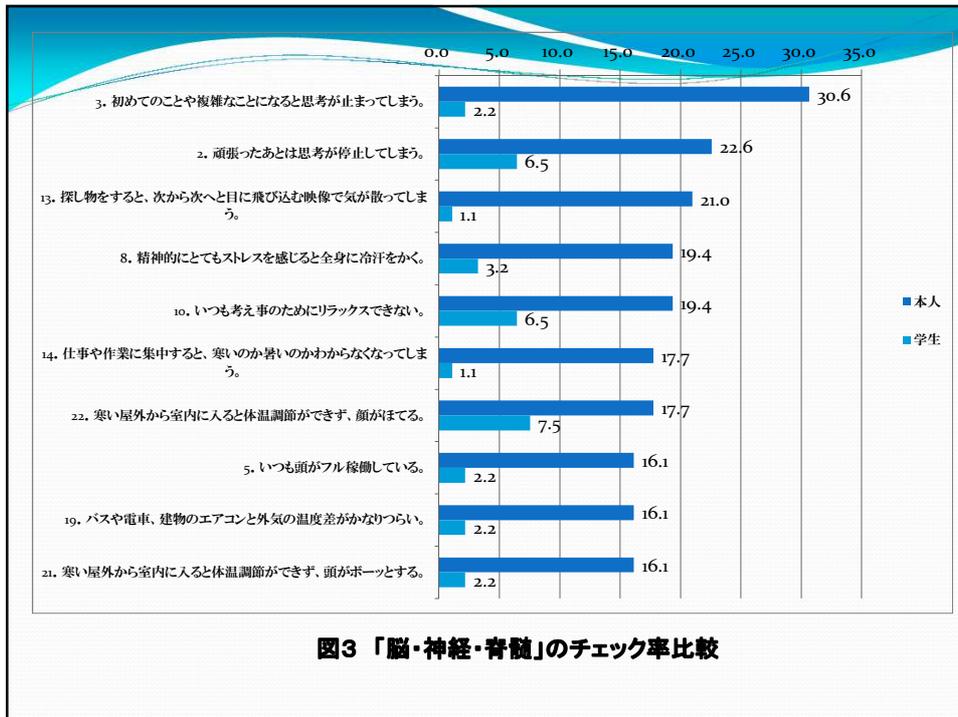


図1 障害種ごとのチェック率比較(単位:%)n=62

- ・一番チェック率が高かったのはADHD。
- ・一方、「診断・判定名なし」であっても5.8%のチェック率が算出されている。



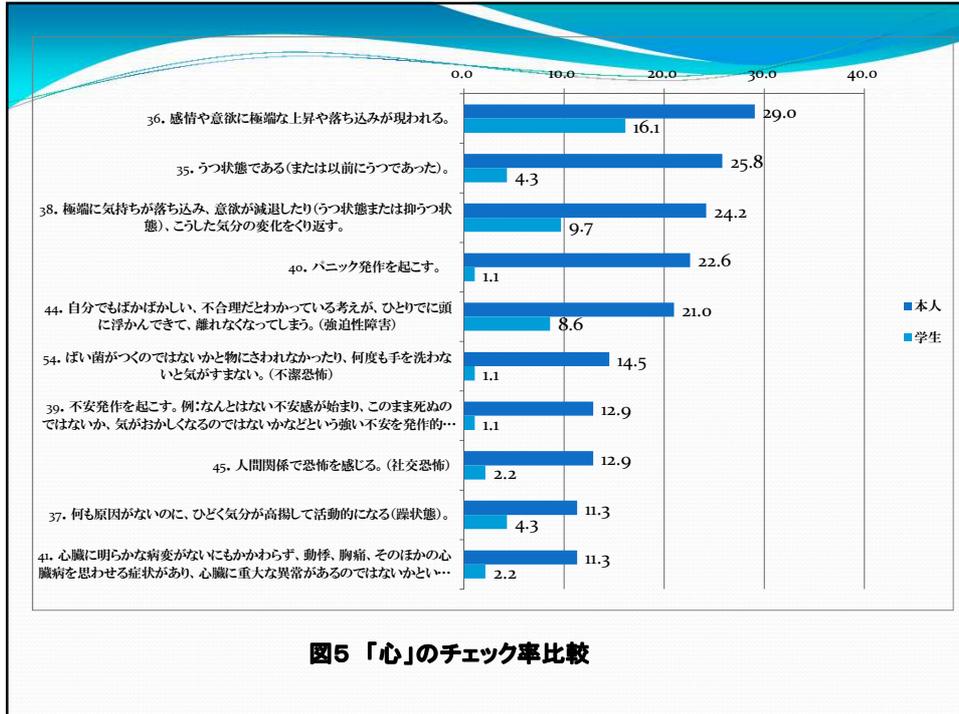


図5 「心」のチェック率比較

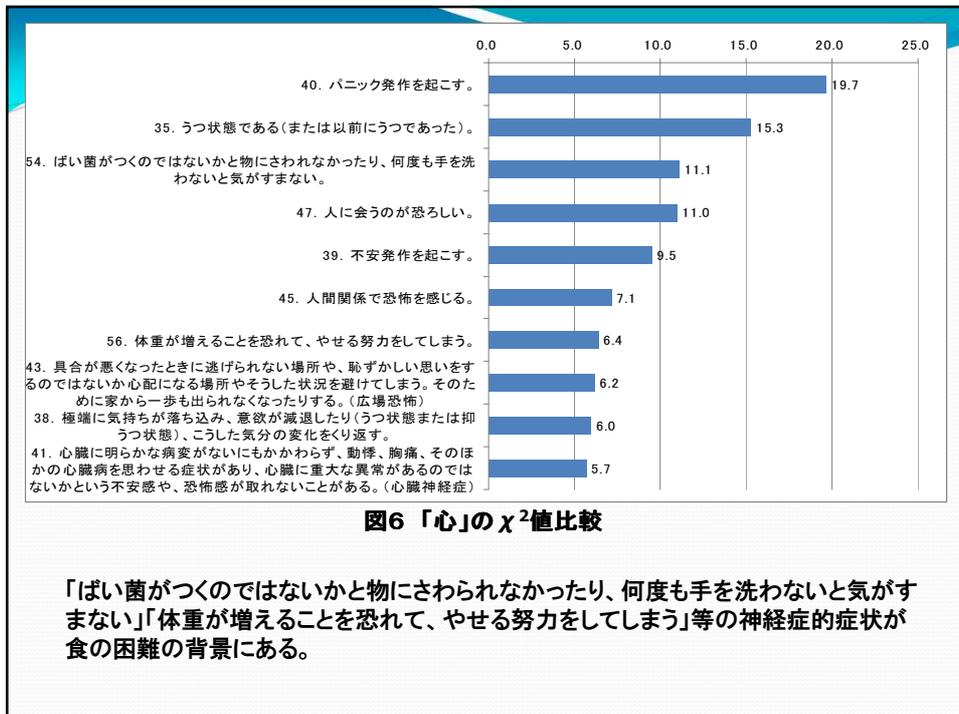


図6 「心」のχ²値比較

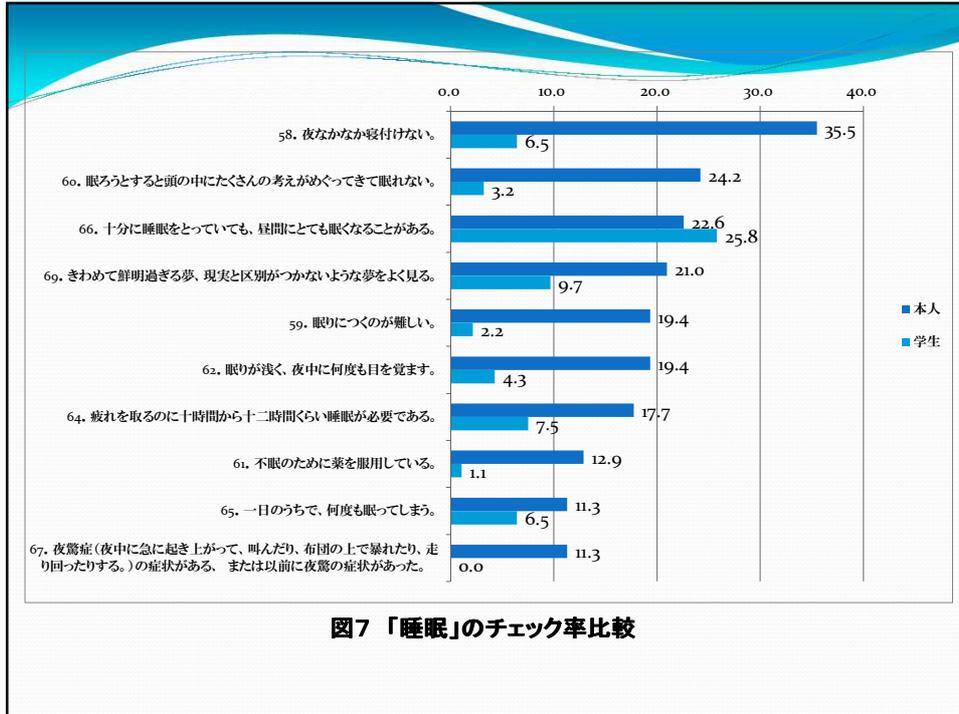


図7 「睡眠」のチェック率比較



図8 「睡眠」のχ²値比較

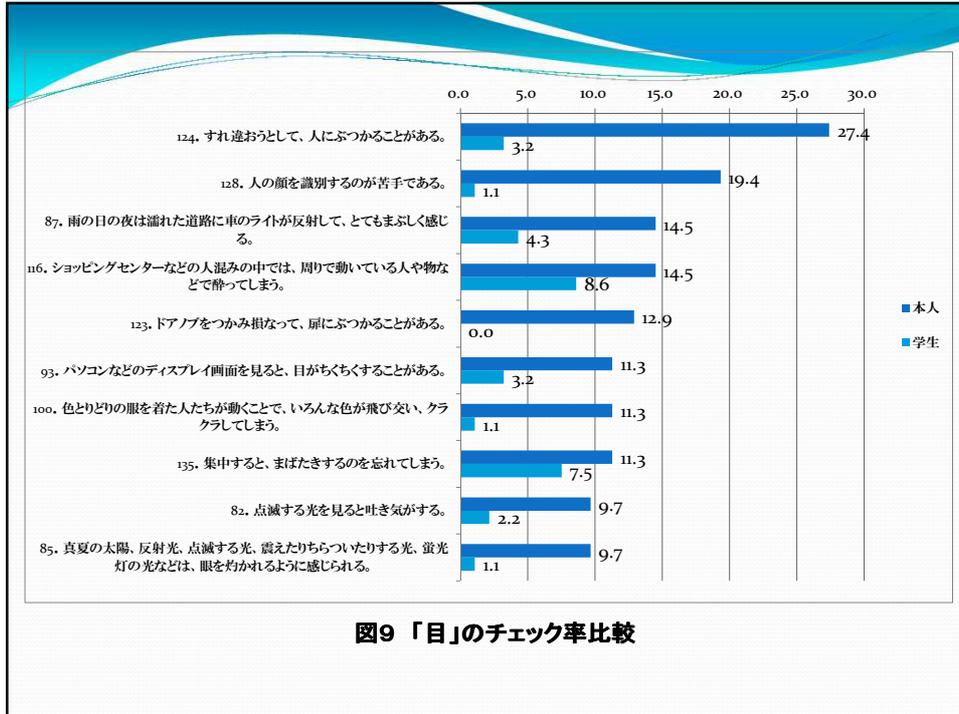


図9 「目」のチェック率比較

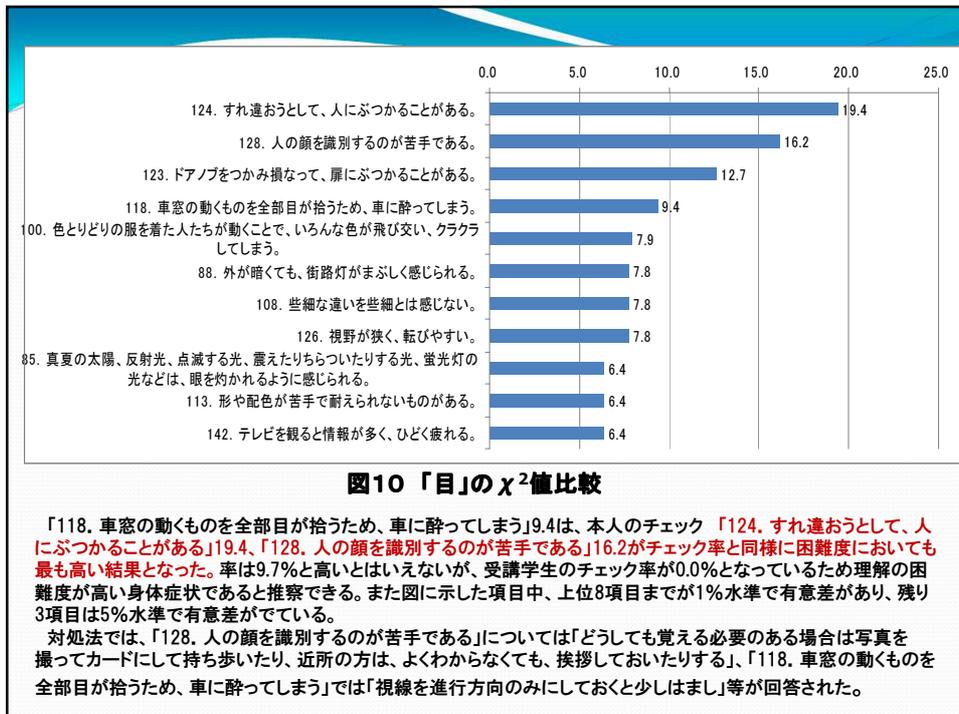


図10 「目」のχ²値比較

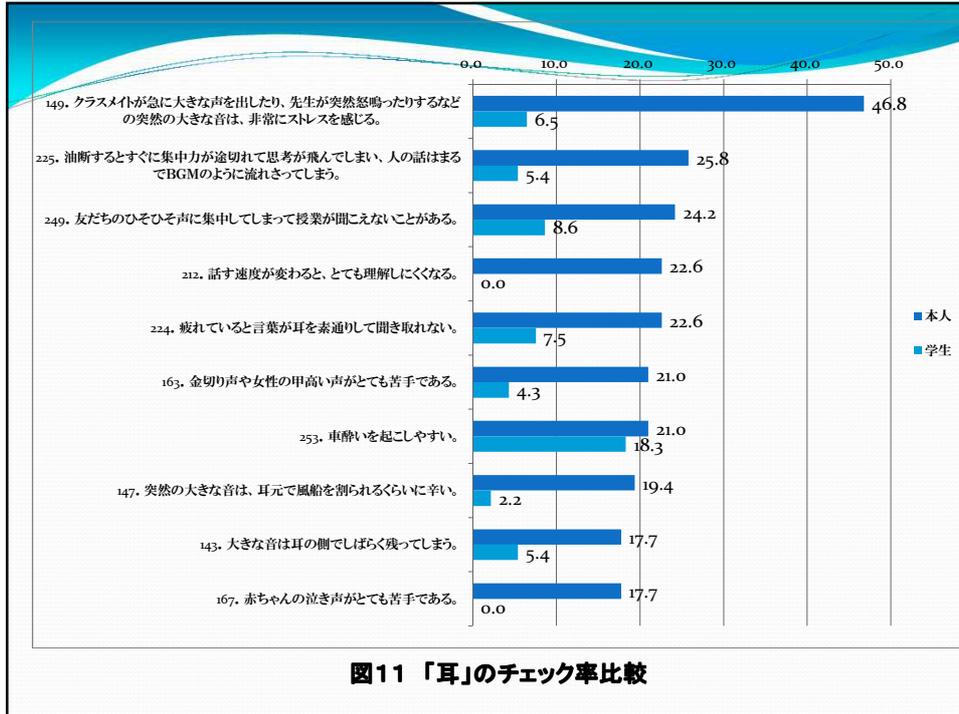


図11 「耳」のチェック率比較

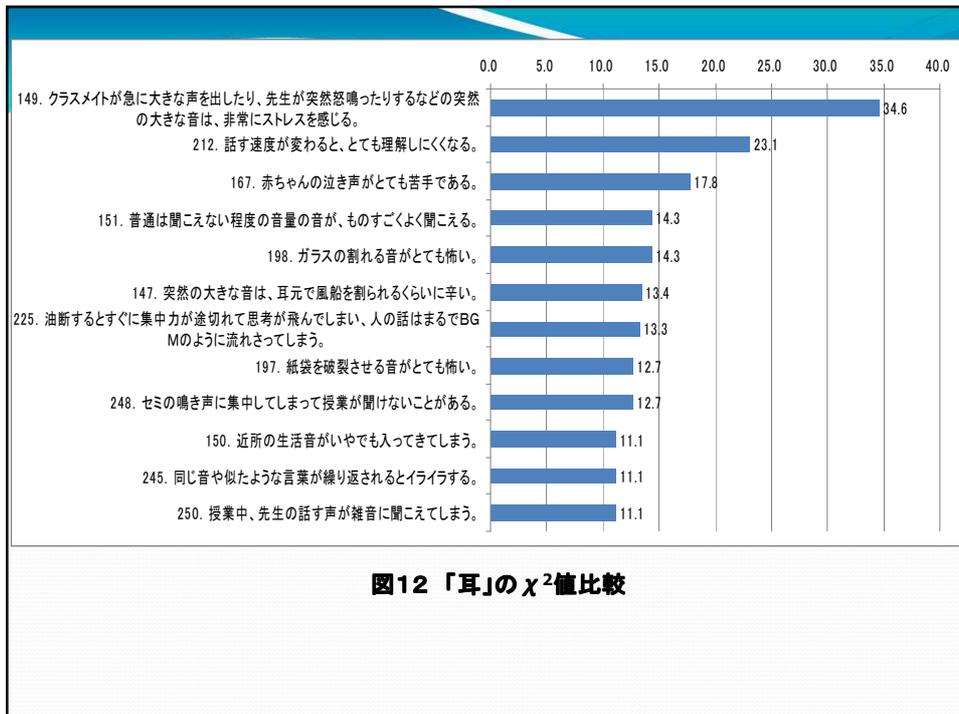


図12 「耳」のχ²値比較

チェック率が高かったのは「149. クラスメイトが急に大きな声を出したり、先生が突然怒鳴ったりするなどの突然の大きな音は、非常にストレスを感じる」46.8%であったが、これは全655項目のなかで最もチェック率の高い項目である。次いで「225. 油断するとすぐに集中力が途切れて思考が飛んでしまい、人の話はまるでBGMのように流れさってしまう」25.8%、「249. 友だちのひそひそ声に集中してしまって授業が聞こえないことがある」24.2%、「212. 話す速度が変わるととても理解しにくくなる」22.6%、「224. 疲れていると言葉が耳を素通りして聞き取れない」22.6%とチェック率が20%を上回る項目が多かった。

- χ^2 値比較でも「149. クラスメイトが急に大きな声を出したり、先生が突然怒鳴ったりするなどの突然の大きな音は、非常にストレスを感じる」34.6が高い困難度を示している。そのほか「212. 話す速度が変わるととても理解しにくくなる」23.1、「167. 赤ちゃんの泣き声がとても苦手である」17.8はともに受講学生のチェック率が0.0%であるために、理解の困難度は高いと推測される。チェック率の上位項目に上がっていない「151. 普通は聞こえない程度の音量の音がものすごくよく聞こえる」14.3、「198. ガラスの割れる音がとても怖い」14.3などがあるが、これらは受講学生のチェック率が0.0%であった項目であり、理解の困難度が高い身体症状であることに注意が必要である。なお図に示した項目はすべて1%水準で有意差がみられた。
- ノイズキャンセリングヘッドフォンやイヤーマフの着用によって音声刺激を和らげる支援が考えられる。また話す速度の変化に聴覚がついていけない発達障害者も少なくないことが明らかになっているが、本人に合わせてゆっくり伝えるとか、紙などに書いて視覚を利用するといふ場合がある。

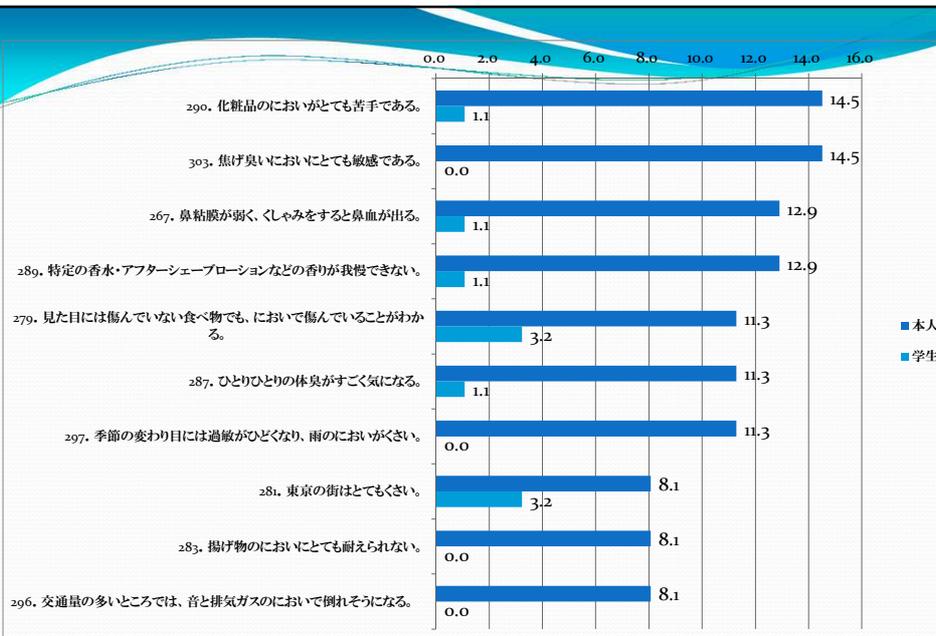


図13 「鼻」のチェック率比較



図14 「鼻」のχ²値比較

•上位8項目にて1%水準の有意差があり、残り5項目は5%水準で有意差があった。

•食に関する困難では「揚げ物のおいにとても耐えられない」、「きゅうりのおいが苦手」が上位にあがった。

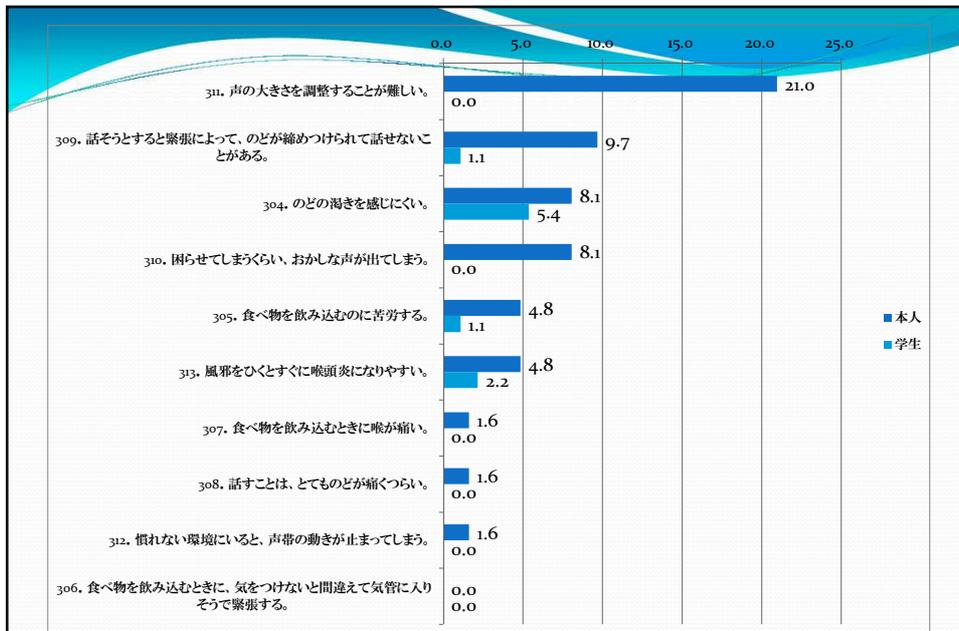


図15 「のど」のチェック率比較

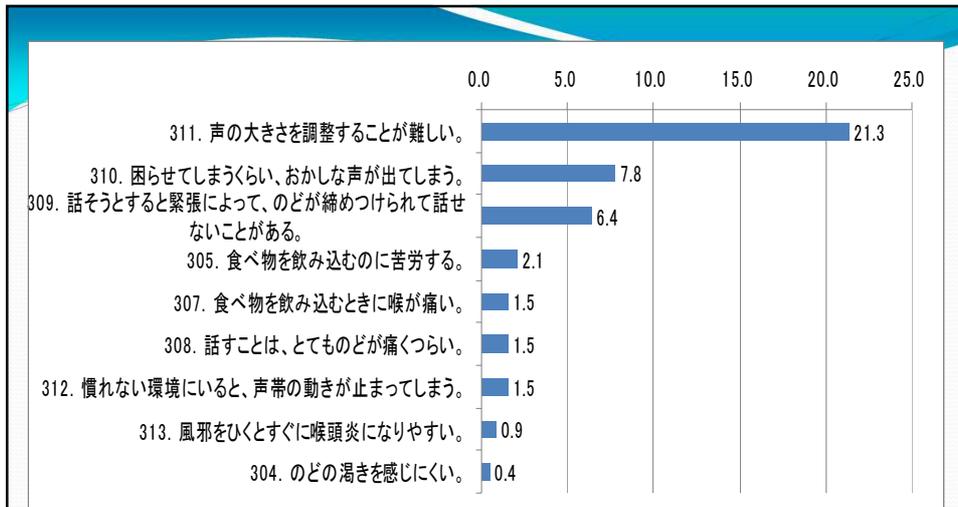


図16 「のど」の χ^2 値比較

・「声の大きさを調整することが難しい」ことに大きな有意差が示されたが、支援の手立てとして、適切な声の大きさを本人にフィードバックしていくことが考えられる。

・食に関する困難では「食べ物を飲み込むのに苦労する」「食べ物を飲み込むときに喉が痛い」など嚥下の困難が上位に挙げられた。

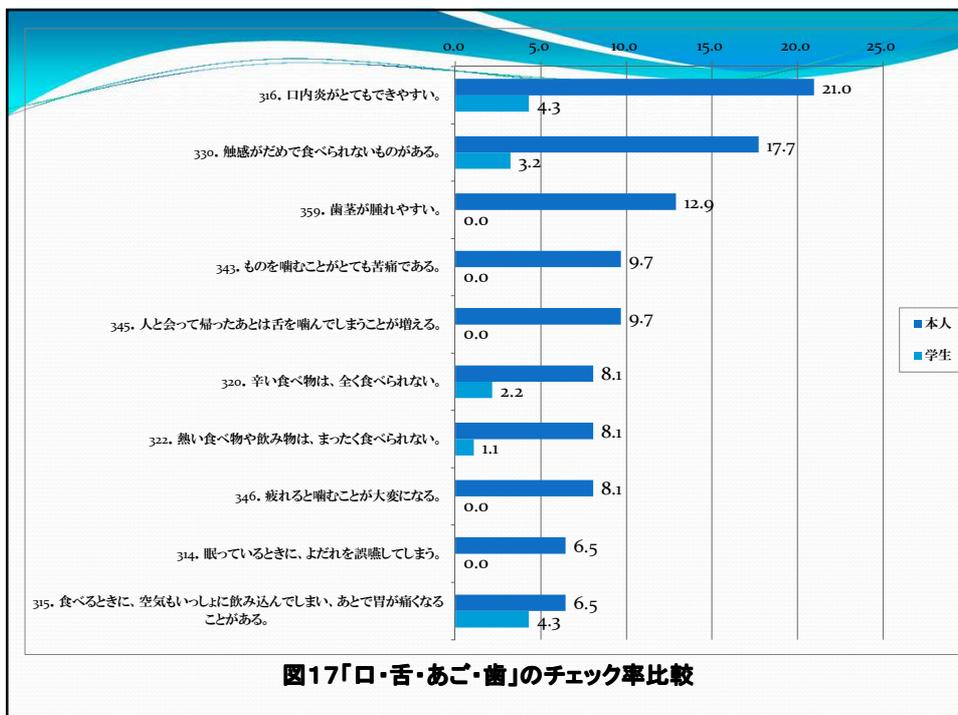


図17 「口・舌・あご・歯」のチェック率比較

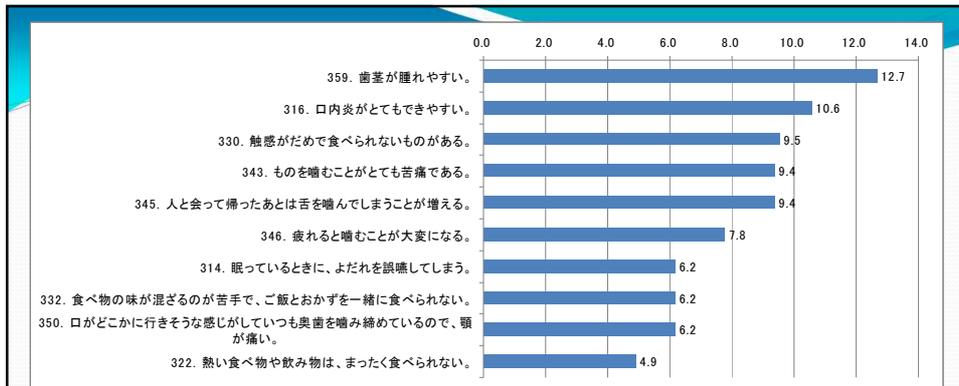


図18 「口・舌・あご・歯」のχ²値比較

一番チェック率が高かったのは「316. 口内炎がとでもできやすい」21.0%、次いで「330. 触感がだめで食べられないものがある」17.7%、「359. 歯茎が腫れやすい」12.9%となった。「触感がだめで食べられないものがある」の具体例では「レバー、マシュマロ」「プリの照り焼き」「肉の脂」「イチゴ、ゼリー」「しいたけ」「長いも、おくら、つるむらさき、モロヘイヤ、海のもの、貝類」等が回答された。

χ²値比較では「359. 歯茎が腫れやすい」12.7が最も困難度の高い項目となった。「332. 食べ物の味が混ざるのが苦手で、ご飯とおかずを一緒に食べられない」6.2、「350. 口がどこかに行きそうな感じがしていつも奥歯を噛み締めているので、顎が痛い」6.2はチェック率では上位にこなかった項目であるが、ともに受講学生のチェック率が0.0%であり、理解の困難度が高くなっている項目である。図に示した項目のうち、上位6項目は1%水準で有意差があり、次いで314、332、350の3項目が5%水準で有意差が見られた。

対処法では「359. 歯茎が腫れやすい」では「歯磨きを怠らず膿を出す」、「316. 口内炎がとでもできやすい」では「すぐ消毒している」と回答された。支援の手立てとして、例えば給食指導では「残さず食べることを強調しがちであるが、食べ物に関する困難を「好き嫌い」ではなく「身体の不具合」の一つとして認め、柔軟な配慮を行うことが不可欠。

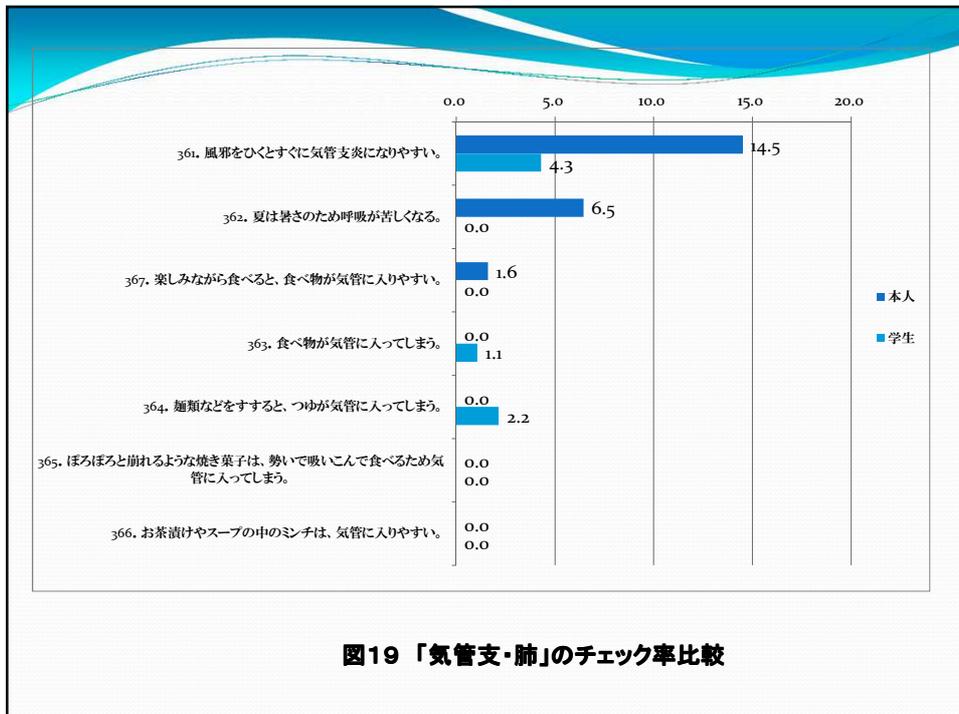


図19 「気管支・肺」のチェック率比較

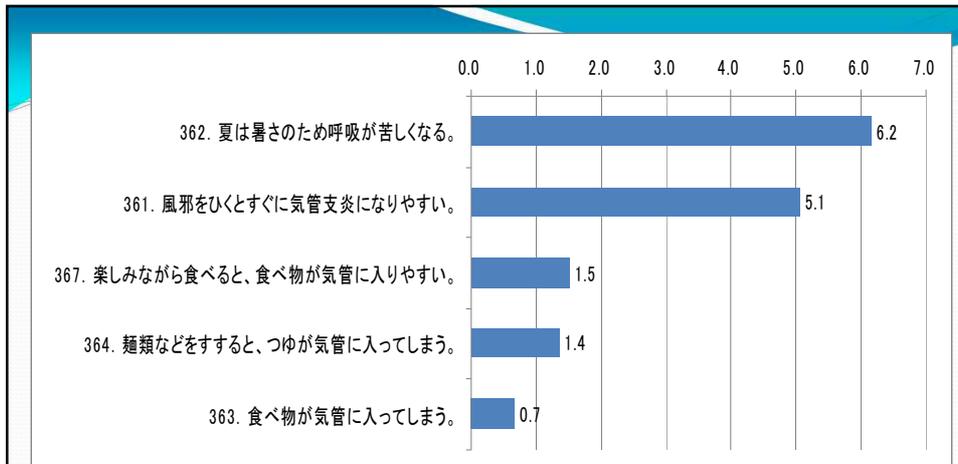


図20 「気管支・肺」の χ^2 値比較

χ^2 値比較では「夏は暑さのため呼吸が苦しくなる」(6.2)、「風邪をひくとすぐに気管支炎になりやすい」(5.1)の2項目のみに5%水準での有意差があった。

「夏は暑さのため呼吸が苦しくなる」の対処法では「**水分を取る**」「**暑間は外出しない**」が、「風邪をひくとすぐに気管支炎になりやすい」では「**ゼイゼイといいやすい。早めに風邪薬を服用する**」「**普段から服薬している**」が回答された。

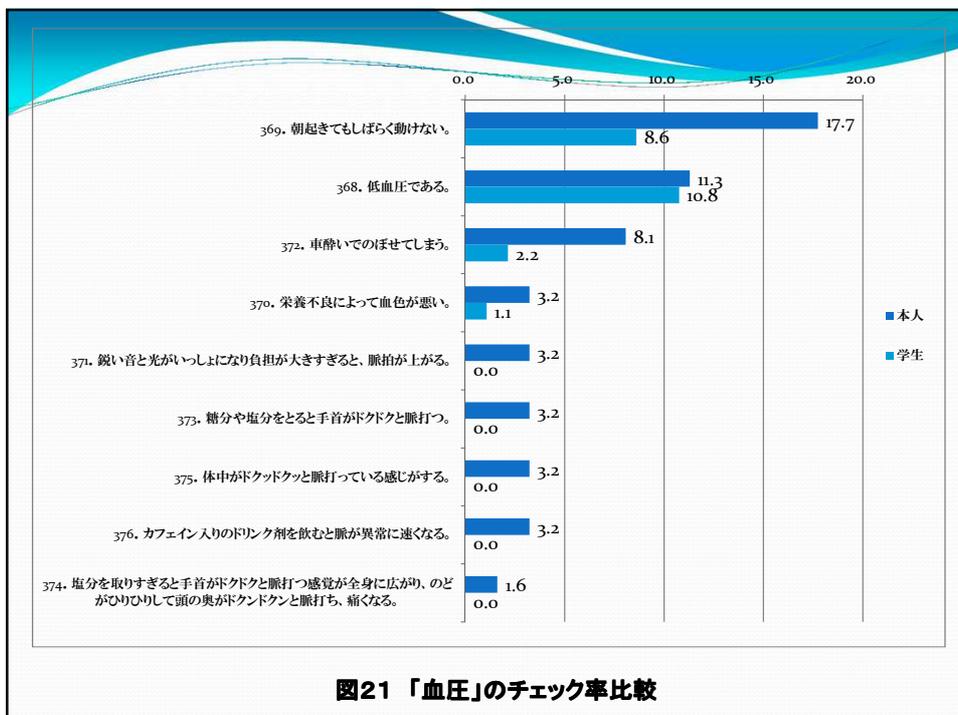


図21 「血圧」のチェック率比較

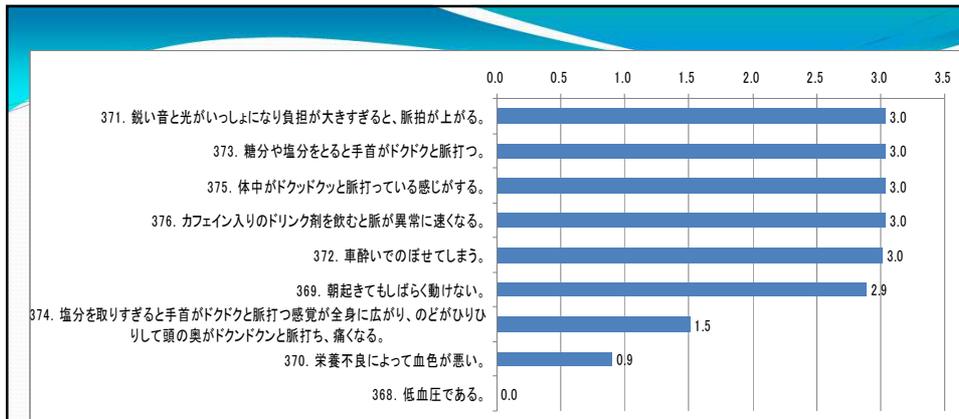


図22 「血圧」の χ^2 値比較

「血圧」の項目でもっともチェック率の高かった項目は「369. 朝起きてもしばらく動けない」17.7%であった。次いで「368. 低血圧である」11.3%となっており、血圧の低さが日常生活に困難を生じさせている場合が少なくないと考えられる。

χ^2 値比較ではどの項目も有意差が出なかった。しかし**食に関する困難**では「**糖分や塩分をとると手首がドクドクと脈打つ**」「**カフェイン入りのドリンク剤を飲むと脈が異常に速くなる**」「**塩分を取りすぎる手首がドクドクと脈打つ感覚が全身に広がり、のどがひりひりして頭の奥がドクドクと脈打ち、痛くなる**」など受講学生のチェック率が0.0%であった項目が複数並んでおり、血圧に関する身体症状は発達障害本人に特有の困難が多いと考えられる。

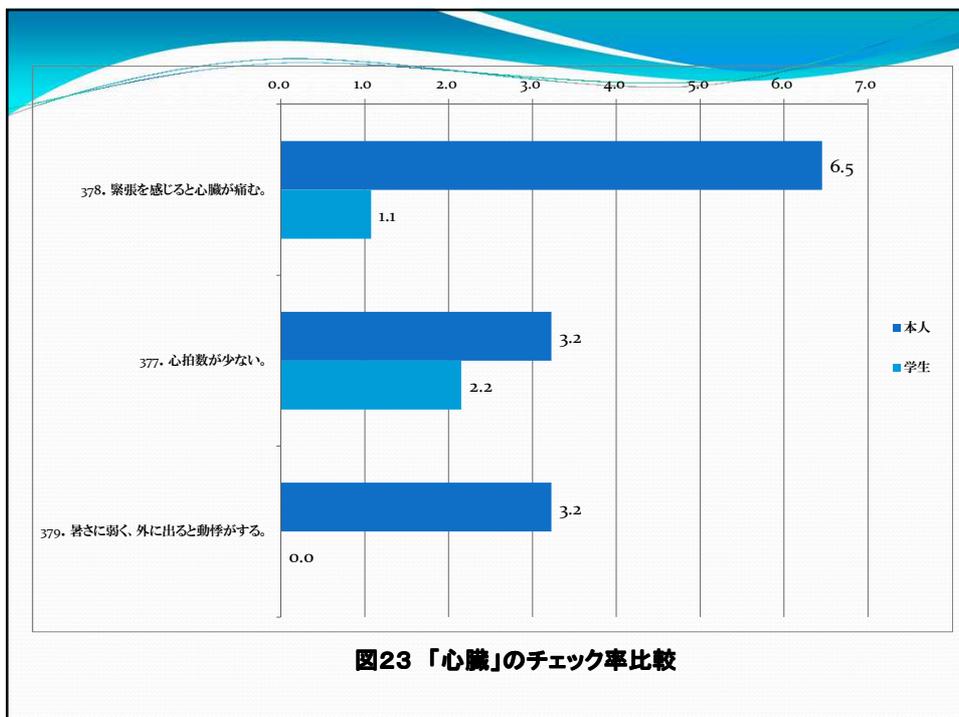


図23 「心臓」のチェック率比較

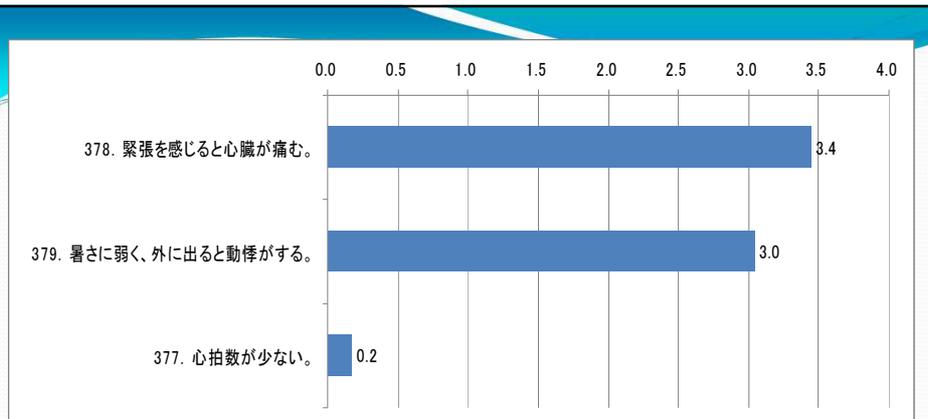


図24 「心臓」の χ^2 値比較

「心臓」の項目で一番チェック率が高かったのは「378. 緊張を感じると心臓が痛む」6.5%であった。 χ^2 値比較では有意差は出ていないが、受講学生にチェックのついていない「379. 暑さに弱く、外に出ると動悸がする」3.2などは理解の困難が生じやすい身体症状であるといえるだろう。対処法は「378. 緊張を感じると心臓が痛む」では「人前では問題ない。自分はできると言い聞かす」、「379. 暑さに弱く、外に出ると動悸がする」では「帽子をかぶる」が挙げられた。

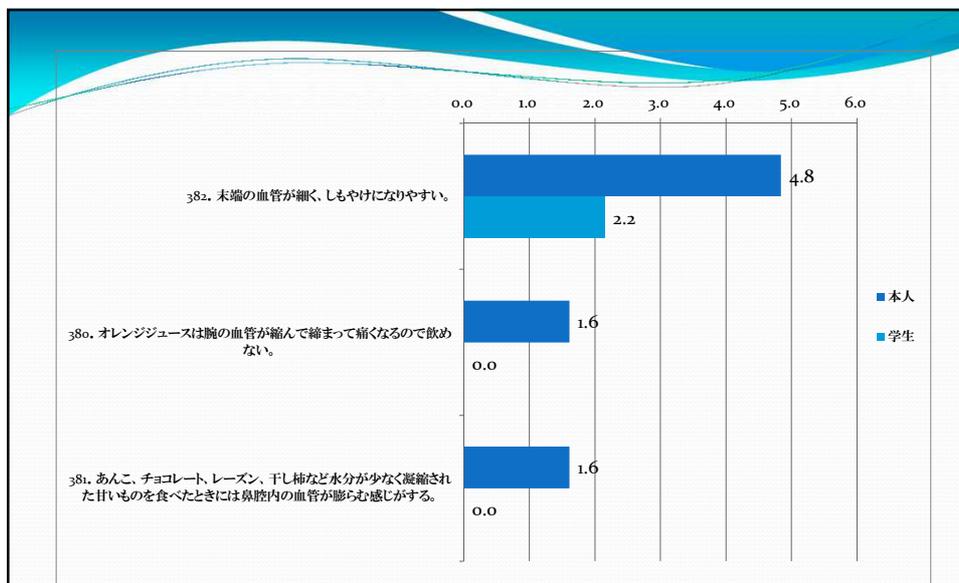


図25 「血管・リンパ節」のチェック率比較

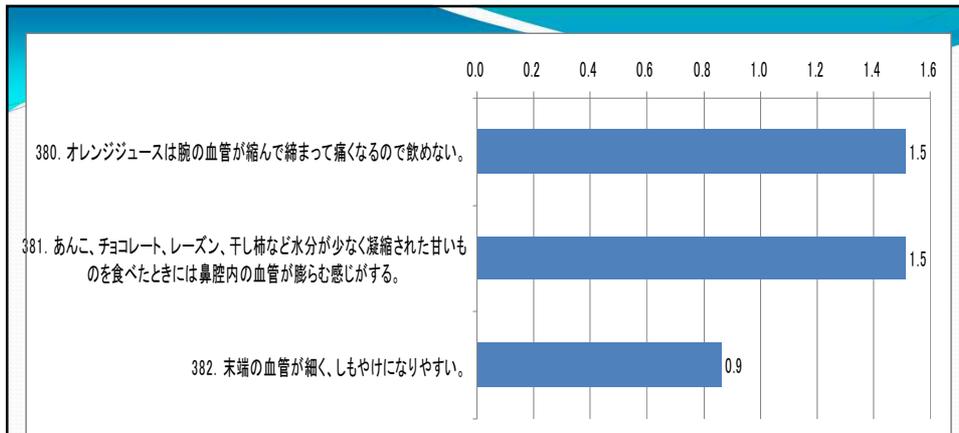


図26 「血管・リンパ節」のχ²値比較

・「血管・リンパ節」の項目で最もチェック率の高かったのは「382. 末端の血管が細く、しもやけになりやすい」4.8%であった。

・χ²値比較では「380. オレンジジュースは腕の血管が縮んで締まって痛くなるので飲めない」1.5、「381. あんこ、チョコレート、レーズン、干し柿など水分が少なく凝縮された甘いものを食べたときには鼻腔内の血管が膨らむ感じがする」1.5と、有意差はでていないものを受講学生のチェック率が0.0%であった食に関する困難が上位にきている。

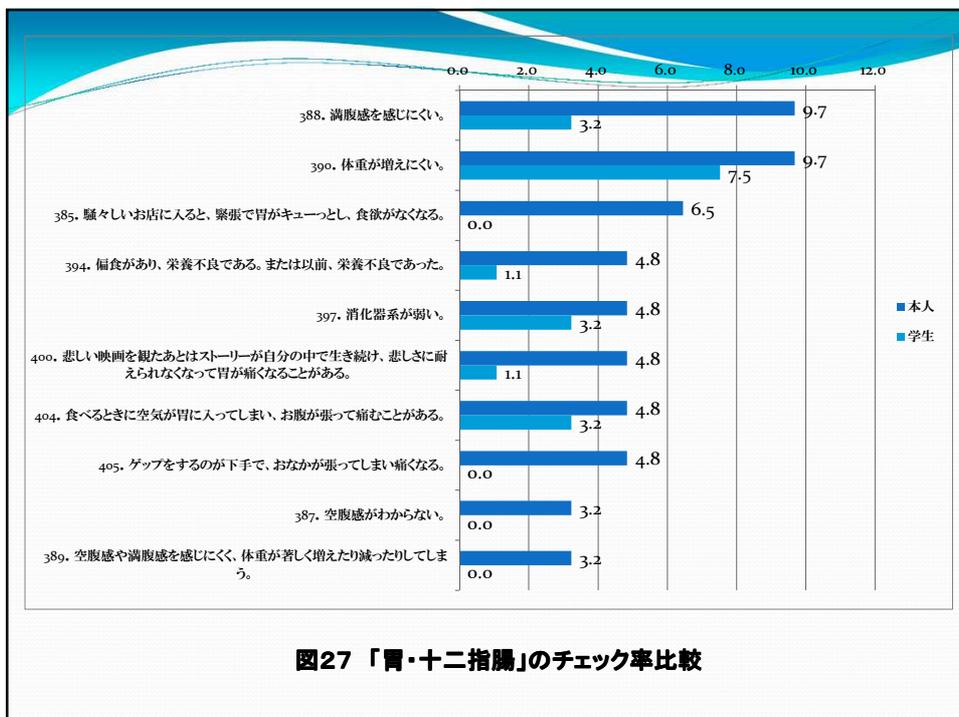


図27 「胃・十二指腸」のチェック率比較

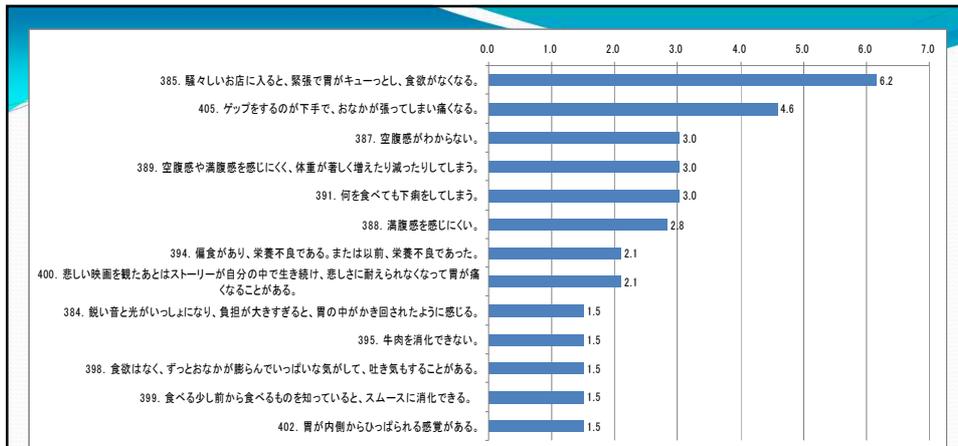


図28 「胃・十二指腸」の χ^2 値比較

「騒々しいお店に入ると、緊張で胃がキューっとし、食欲がなくなる。」のみ5%水準で有意差が見られた。

食に関する困難では「ゲップをするのが下手で、おなかが張ってしまい痛くなる」「空腹感がわからない」「何を食べても下痢をしてしまう」「牛肉を消化できない」など各種の困難を抱えていることが明らかになった。

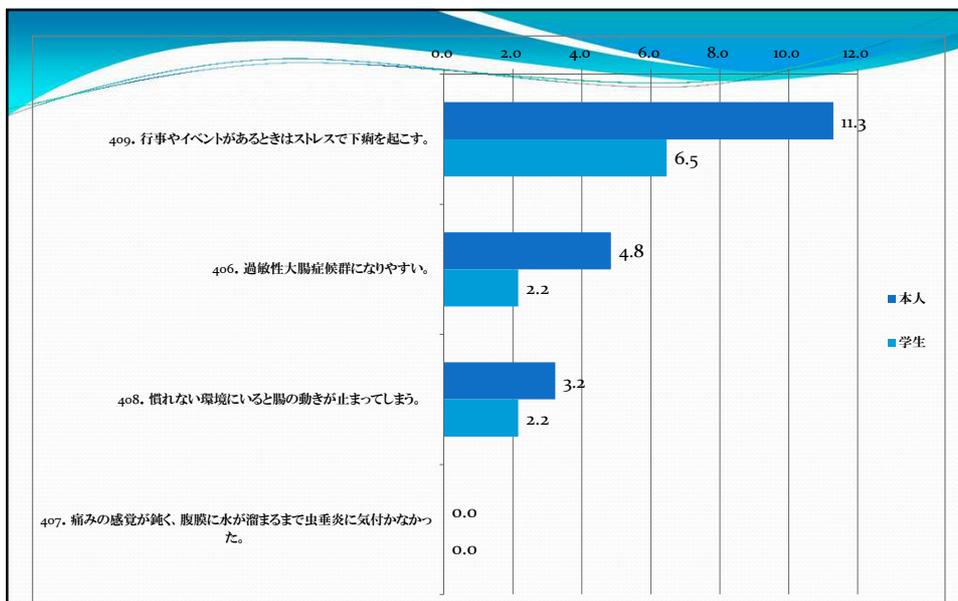


図29 「腸」のチェック率比較

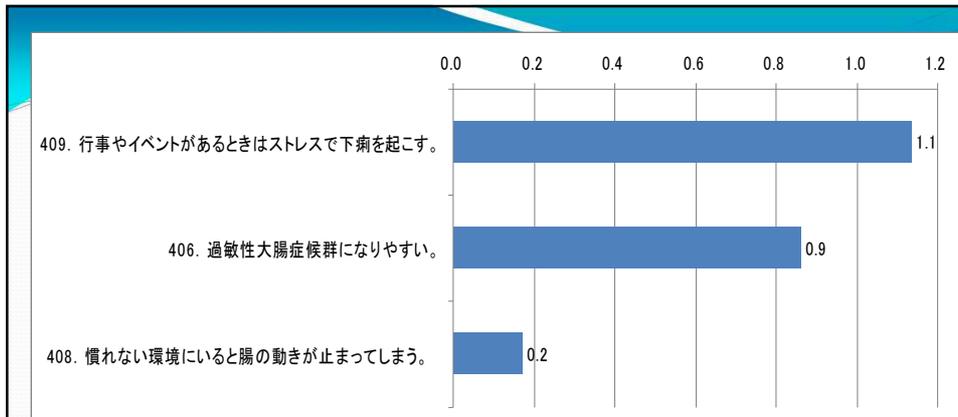


図30 「腸」の χ^2 値比較

「腸」の項目でチェック率が高かったのは「行事やイベントがあるときはストレスで下痢を起こす」(11.3%)であった。

χ^2 値比較ではどの項目も有意差がでなかったが、今後項目数を増やしてさらに精査が必要。

「行事やイベントがあるときはストレスで下痢を起こす」の対処法では「安心できるトイレを探す」があげられた。

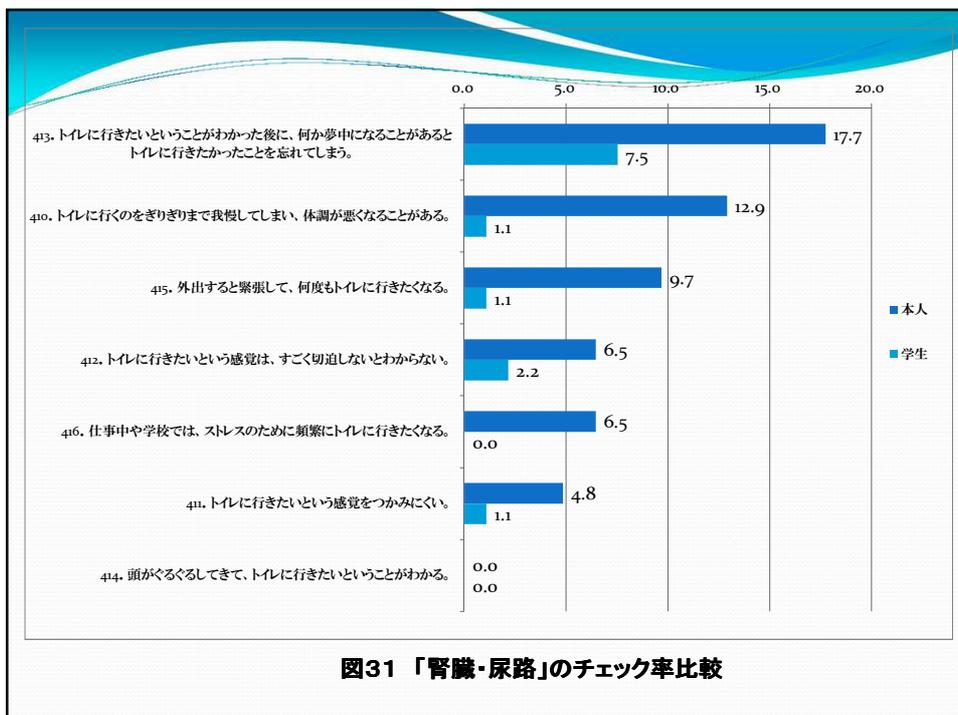


図31 「腎臓・尿路」のチェック率比較

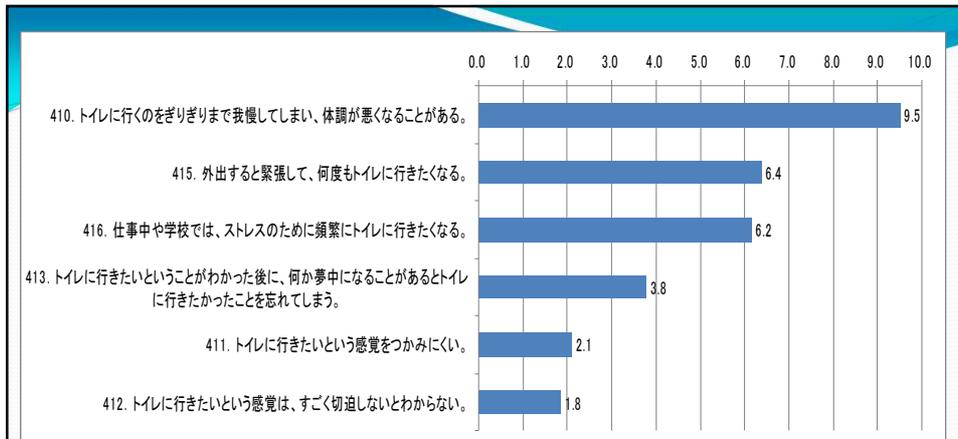


図32 「腎臓・尿路」のχ²値比較

最もチェック率の高かった項目は「413. トイレに行きたいということがわかった後に、何か夢中になるとトイレに行きたかったことを忘れてしまう」17.7%であった。χ²値比較で発達障害の本人の困難度が最も高かった項目は「410. トイレに行くのをぎりぎりまで我慢してしまい、体調が悪くなることもある」9.5であり、発達障害本人と受講学生の間で1%水準の有意差があった。

「415. 外出すると緊張して何度もトイレに行きたくなる」6.4、「416. 仕事や学校ではストレスのために頻繁にトイレに行きたくなる」6.2、「413. トイレに行きたいということがわかった後に、何か夢中になるとトイレに行きたかったことを忘れてしまう」3.8は5%水準で有意差があり、発達障害本人に特有な身体症状であるといえる。

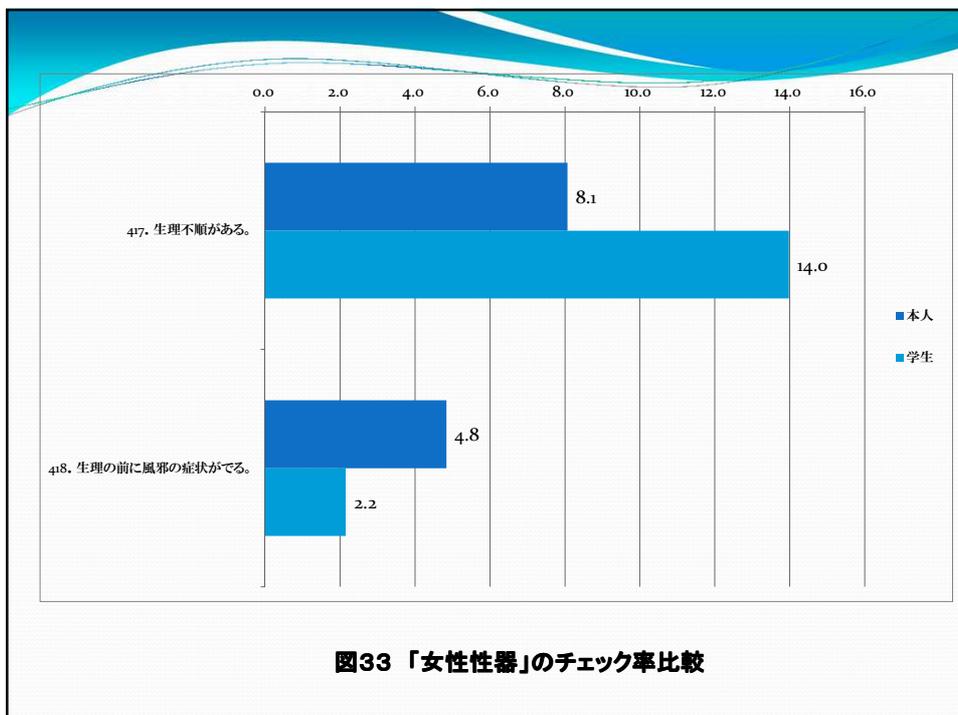


図33 「女性性器」のチェック率比較

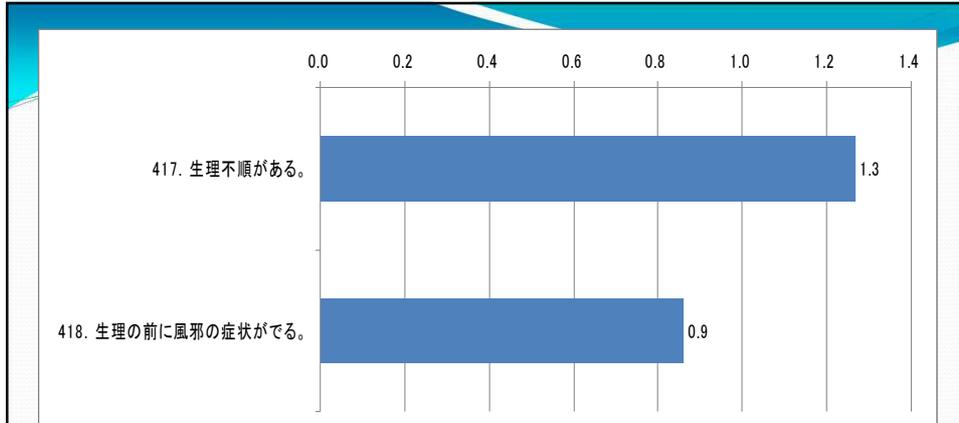


図34 「女性性器」のχ²値比較

「女性性器」の項目では「生理不順がある。」において受講学生のチェック率(14.0%)が発達障害本人(8.1%)を上回る結果となった。

「生理不順がある」の対処法では「年に2回では心配になり産婦人科に相談」「ピルを服用」が、「生理の前に風邪の症状がでる」では「あたためる、マッサージ、寝る」「休息する」が回答された。

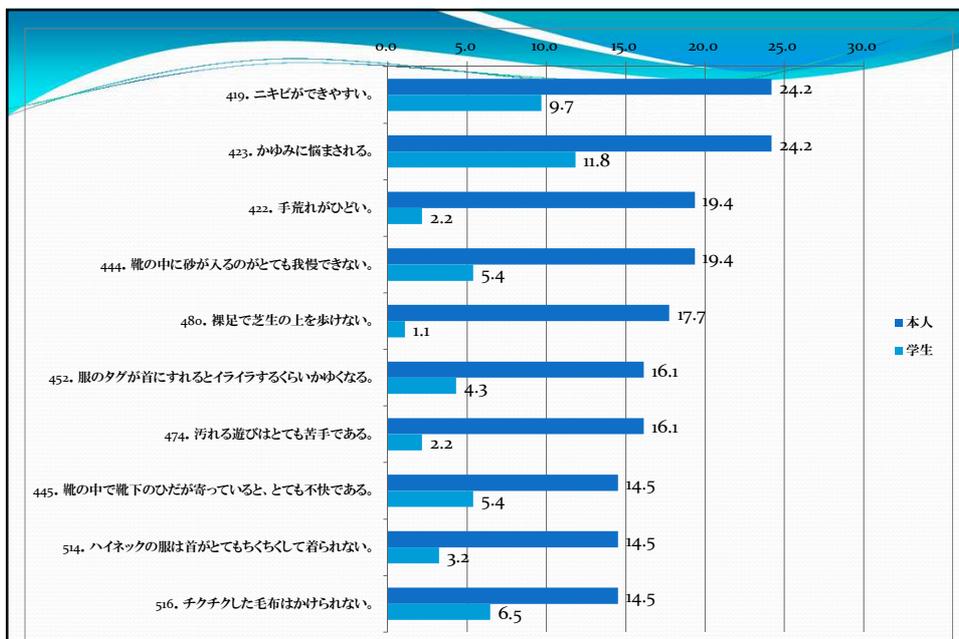
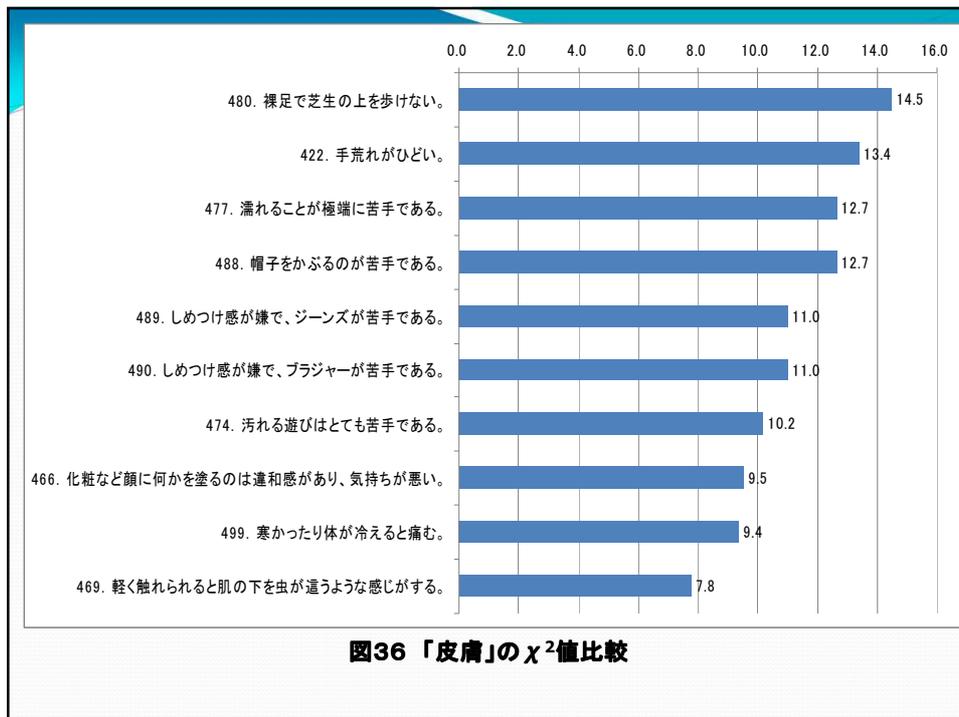


図35 「皮膚」のチェック率比較



最もチェック率が高かったのは「419. ニキビがしやすい」24.2%および「423. かゆみに悩まされる」24.2%であった。皮膚に関する困難のチェック率は高いものが多く、「422.手荒れがひどい」19.4%、「444. 靴の中に砂が入るのがとても我慢できない」19.4%、「480. 裸足で芝生の上を歩けない」17.7%と続いている。

- χ^2 値比較では上位10項目すべてにおいて1%水準で有意差が現れ、なかでも本人の平均チェック率17.7%に対し受講学生のチェック率が1.1%と低かった「480. 裸足で芝生の上を歩けない」14.5が発達障害本人の困難度では最上位であった。また「477. 濡れることが極端に苦手」12.7、「488. 帽子をかぶるのが苦手」12.7、「489. しめつけ感が嫌で、ジーンズが苦手」11.0、「490. しめつけ感が嫌で、ブラジャーが苦手」11.0の各身体症状は、受講学生のチェック率が0.0%であり、やはり発達障害本人に特有の身体症状として表れているものと推測できる。
- 対処法については、「480. 裸足で芝生の上を歩けない」では「サンダル必携」「少しずつ経験の積み重ね」、「422. 手荒れがひどい」では「洗い物をまとめてする。ゴム手袋をする。クリームを塗る」「専門機関への受診、ベビーオイルやハンドクリームの塗布」、「477. 濡れることが極端に苦手である」では「服が濡れるのが苦手です。少しでも濡れたらすぐ着替えます」「雨の日は外出を控える。仕方ないときは完全防備。足ふきマットは自分専用など」が回答された。
- 皮膚に関する身体症状や不調・不具合は多岐にわたっており、困難度も高いものが多い。また χ^2 値比較で上位に挙げられた項目をみると、**感覚刺激に対する過反応として生じている身体症状が多い**といえる。岩永(2010)は感覚刺激に対する過反応の原因として、①神経系の問題により感覚知覚の閾値が低い、②情緒面が不安定、③感覚刺激に対する解釈の問題がある、④不快な感覚刺激に過剰に集中している、⑤刺激の取捨選択ができない、⑥反応表出の問題があるなどを指摘しており、これらいくつかを組み合わされて過反応が生じているとしている。
- 皮膚の身体症状の不具合のように感覚刺激に対する過反応が生じていると考えられる場合、まず過反応を生じさせている感覚刺激を取り除いたのち、どのような背景から過反応が生じていたのかを分析していくことが重要である。

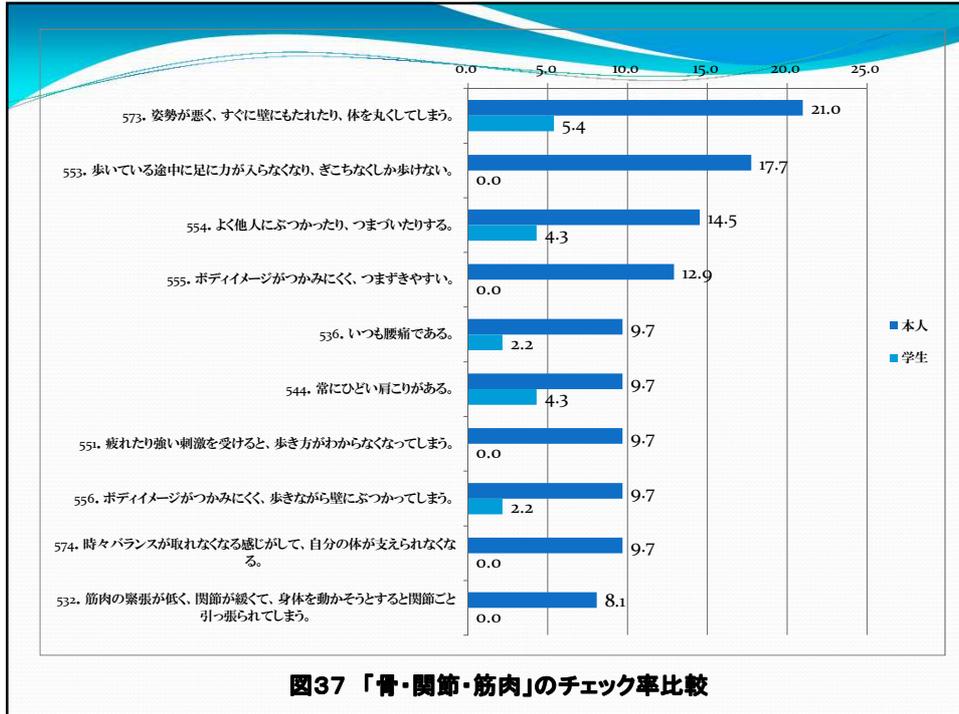


図37 「骨・関節・筋肉」のチェック率比較

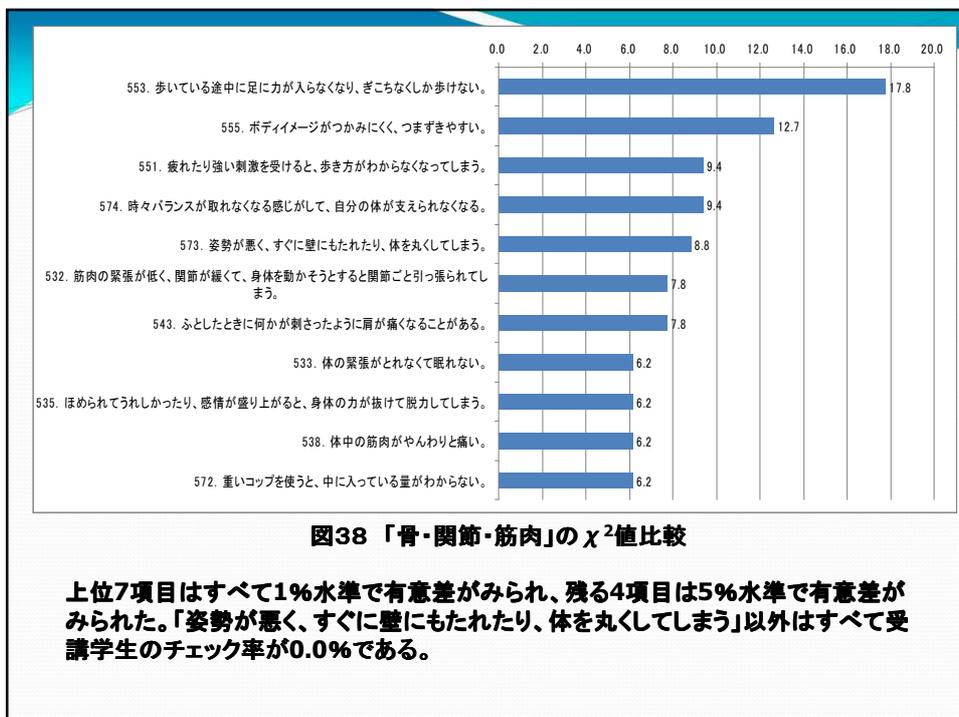


図38 「骨・関節・筋肉」のχ²値比較

上位7項目はすべて1%水準で有意差がみられ、残る4項目は5%水準で有意差がみられた。「姿勢が悪く、すぐにもたれたり、体を丸くしてしまう」以外はすべて受講学生のチェック率が0.0%である。

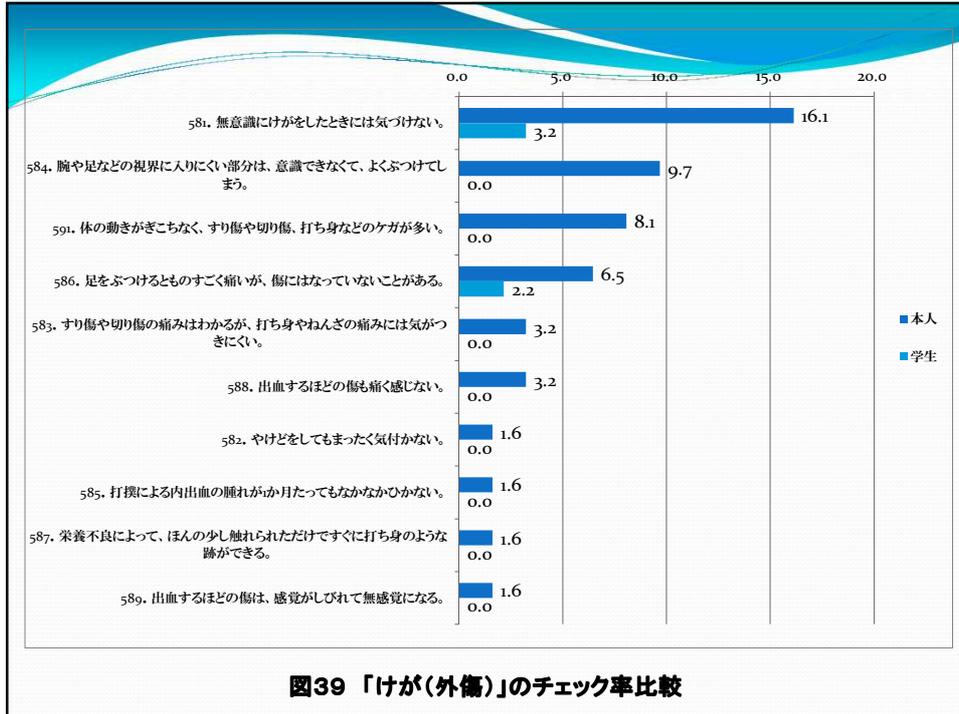


図39 「けが(外傷)」のチェック率比較

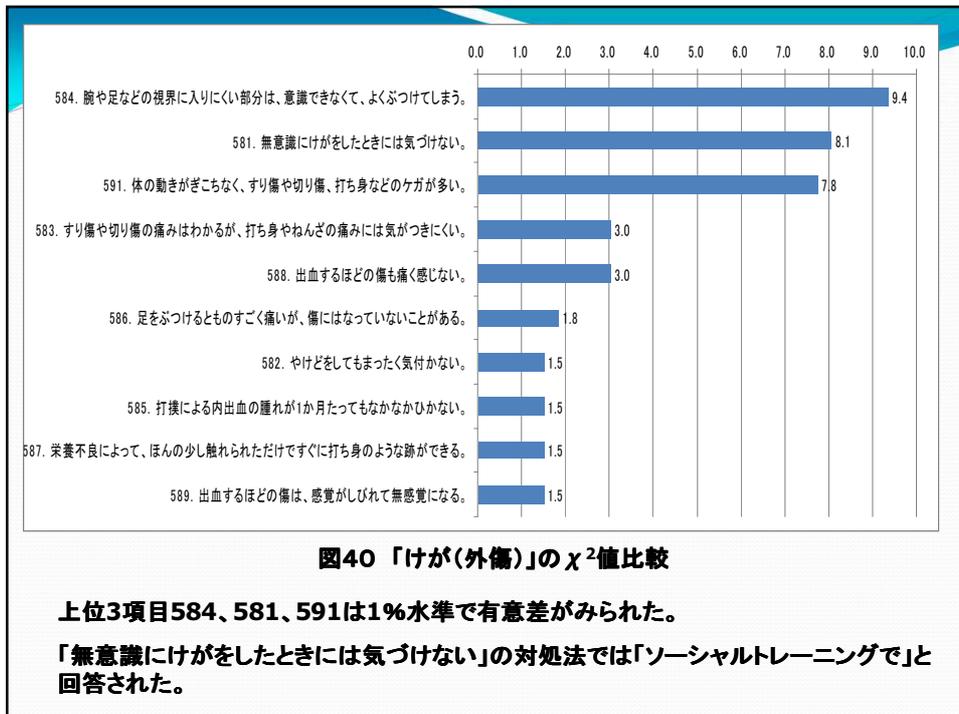


図40 「けが(外傷)」の χ^2 値比較

上位3項目584、581、591は1%水準で有意差がみられた。

「無意識にけがをしたときには気づけない」の対処法では「ソーシャルトレーニングで」と回答された。

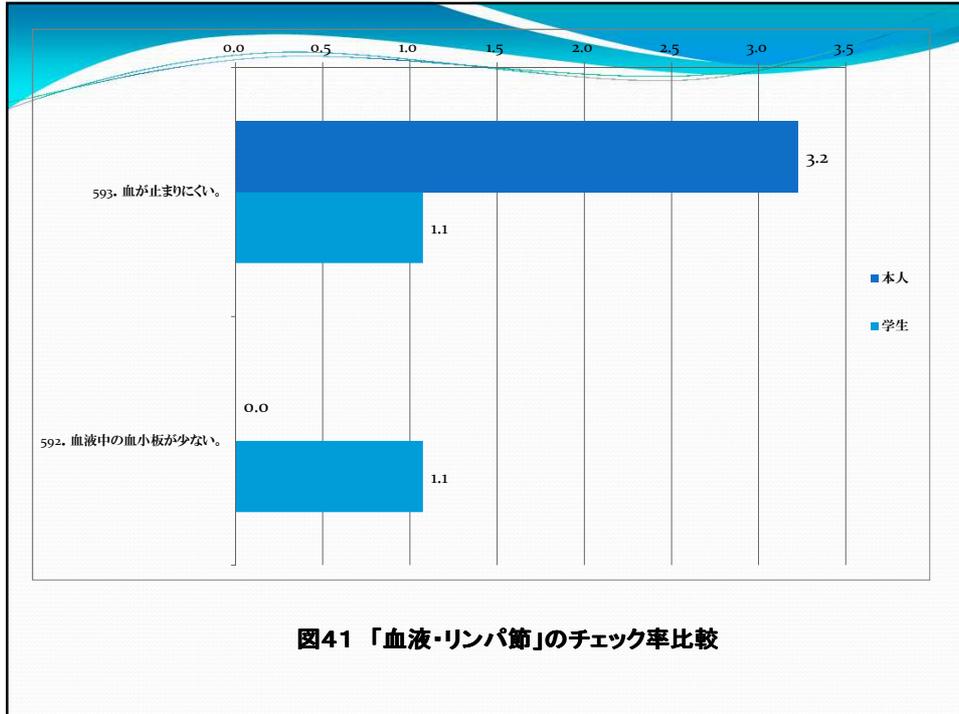


図41 「血液・リンパ節」のチェック率比較

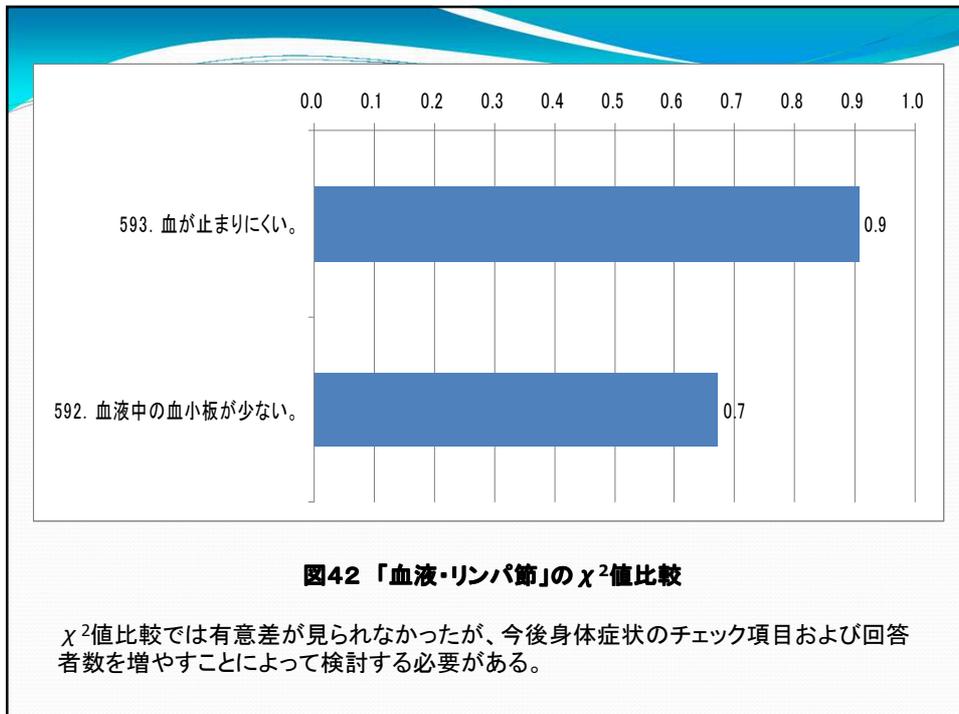


図42 「血液・リンパ節」のχ²値比較

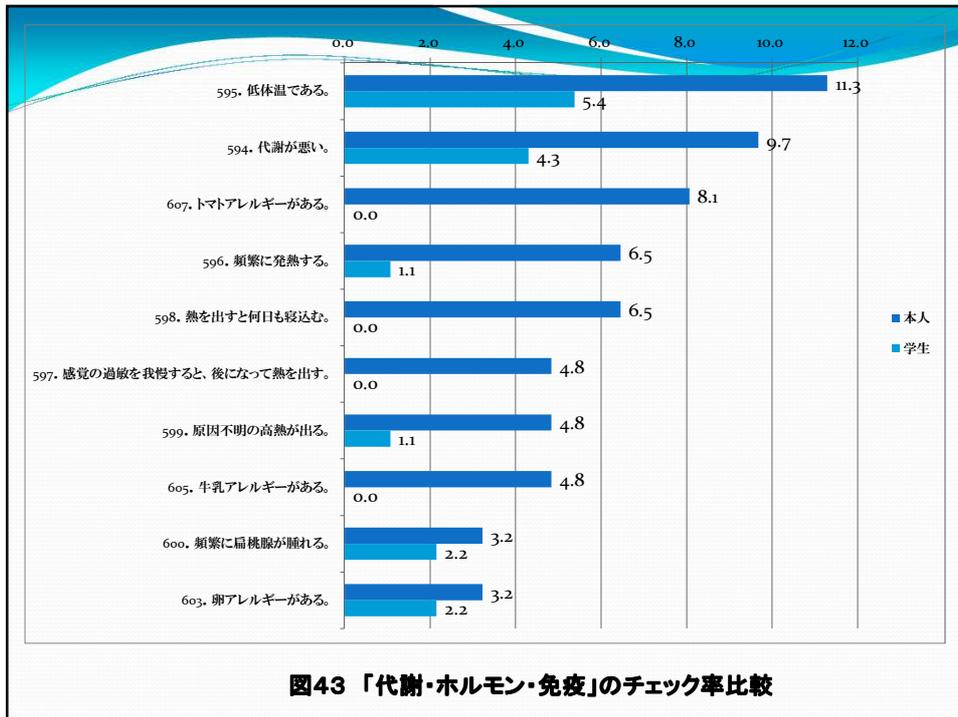


図43 「代謝・ホルモン・免疫」のチェック率比較

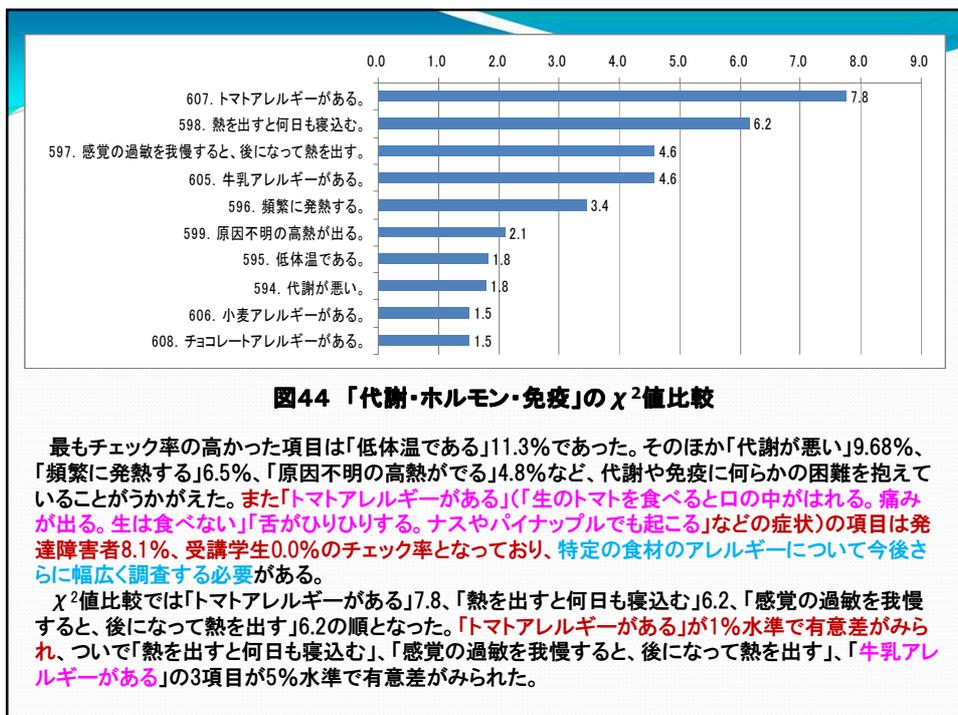


図44 「代謝・ホルモン・免疫」の χ^2 値比較

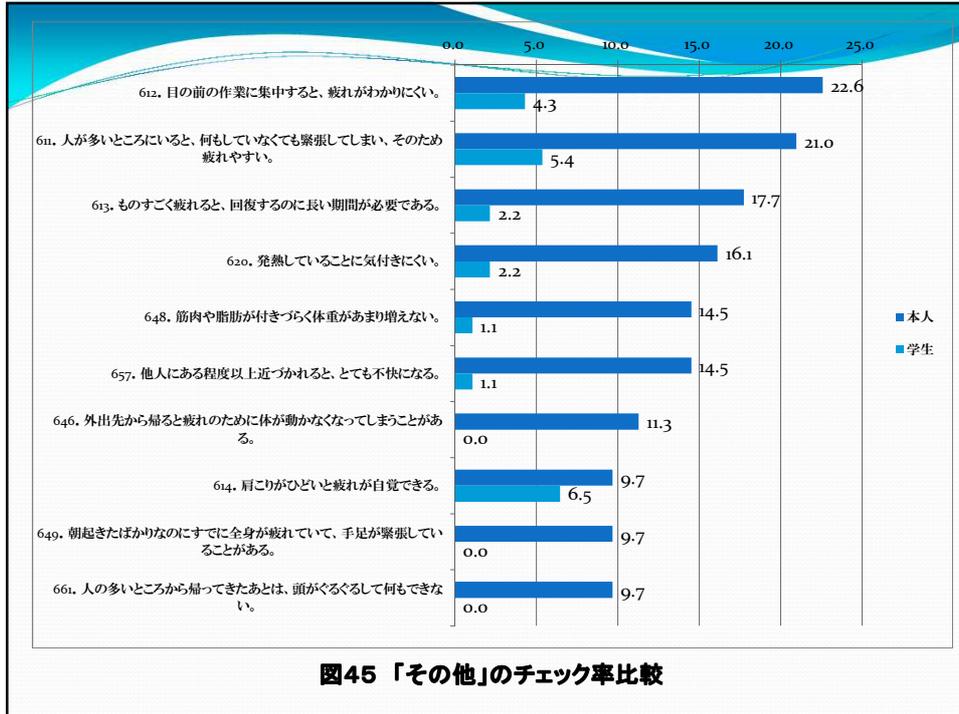


図45 「その他」のチェック率比較



図46 「その他」のχ²値比較

図に示した項目はすべて1%水準で有意差がみられた。「目の前の作業に集中すると、疲れがわかりにくい」の対処法では「時計でどのくらい作業したか確認する」「人に休憩を促してもらおう」が、「外出先から帰ると疲れのために体が動かなくなってしまうことがある」では「早めに切り上げて帰る」「外出した日は無理して動かない」が回答された。

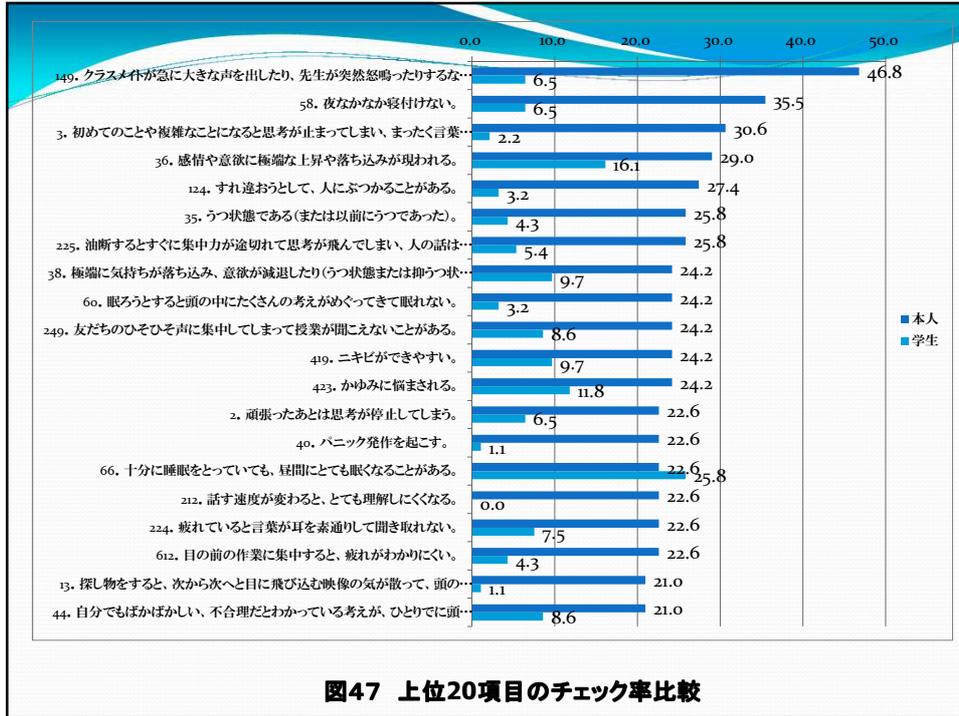


図47 上位20項目のチェック率比較

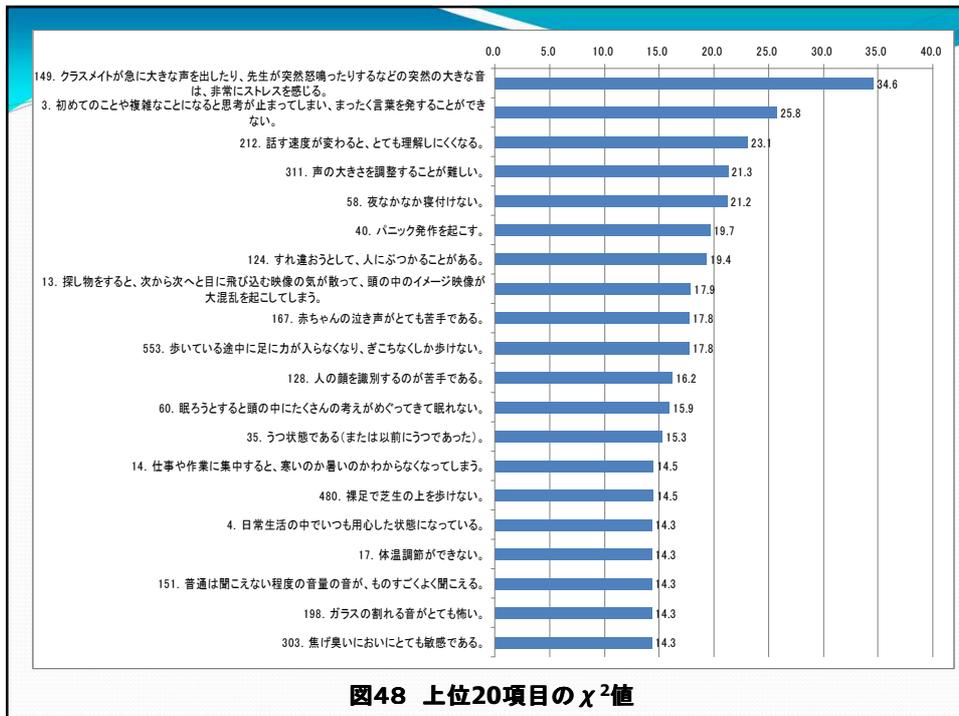


図48 上位20項目のχ²値

- これらの項目はすべて1%水準で有意差がみられた。

- 一番有意差が大きかったのは「クラスメイトが急に大きな声を出したり、先生が突然怒鳴ったりするなどの突然の大きな音は、非常にストレスを感じる」(34.6)。チェック率でも発達障害本人46.8%と一番高く、半数近い当事者がこの点での不具合を抱えていることが明らかとなった。
- 次いで「初めてのことや複雑なことになると思考が止まってしまい、まったく言葉を発することができない」(25.8)となった。チェック率では本人30.6%に対して受講学生2.2%となり、この項目も当事者でない場合には理解されにくい不具合であることが示唆される。

おわりに

- 本調査では、発達障害を有するないしその疑いのある本人の方を対象に、どのような身体の不調・不具合などの身体症状を抱えているのかを調査し、支援の課題を明らかにしてきた。
- 全665項目の不具合について本人のチェック数と受講学生のチェック数から χ^2 乗検定を行い、各項目の困難度を算出したが、665項目中116項目において1%水準での有意差がみられ、さらに269項目において5%水準で有意差がみられた。

おわりに

- 身体の部位ごとに本人の困難度の高い項目を算出したが、部位によって設定した項目数にかなりバラツキがあり、とくに項目数が極端に少ない箇所については、今後チェック項目を加えて分析を重ねていく必要が不可欠である。
- 今回の調査では発達障害本人62名、受講学生93名から回答を得たが、両者とも今後の継続調査において回答者数を拡大させ、分析結果を精緻にさせていく必要がある。
- 665と項目数が多いことにより、特に発達障害本人の方からは「回答し終えることが大変」といった意見が寄せられた。項目数のバランスによって、前述したようにさらに項目数を増やさなくてはならない場合もあるが、一方で本人の方がより回答しやすいように、チェック項目の精査も今後必要になる。

文献

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎(2008)『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつなりたい—』医学書院。
- ブレンダ・スミス・マイルズほか(萩原拓訳、2004)『アスペルガー症候群と感覚過敏性への対処法』東京書籍。
- ダグラス・ピクレン編著、リチャード・アトフィールド、ラリー・ビショネットほか著(鈴木真帆監訳、2009)『「自」らに「閉」じこもらない自閉症者たち—「話せない」7人の自閉症者が指で綴った物語—』エスコアール出版部。
- ダニエル・タメット(古屋美登里訳、2007)『ぼくには数字が風景に見える』講談社。
- ドナ・ウイリアムズ(河野万里子訳、1993)『自閉症だったわたしへ』新潮社。
- ドナ・ウイリアムズ(川手鷹彦訳、2009)『自閉症という体験—失われた感覚を持つ人びと—』誠信書房。
- 藤家寛子(2004)『他の誰かになりたかった—多重人格から目覚めた自閉の少女の手記—』花風社。
- 藤家寛子(2005)『あの扉のむこうへ—自閉の少女と家族、成長の物語—』花風社。
- 藤家寛子(2007)『自閉っ子は、早期診断がお好き』花風社。
- 藤家寛子・浅見淳子(2009)『自閉っ子的心身安定生活!』花風社。
- グニラ・ガーランド(ニキ・リンコ訳、2000)『ずっと「普通」になりたかった。』花風社。
- 東田直樹(2007)『自閉症の僕が跳びはねる理由—会話の出来ない中学生がつづる内なる心—』エスコアール出版部。
- 東田直樹・東田美紀(2005)『この地球にすんでいる僕の仲間たちへ—12歳の僕が知っている自閉の世界—』エスコアール出版部。
- 筆談援助の会編(2008)『言えない気持ちを伝えたい—発達障がいのある人へのコミュニケーションを支援する筆談援助—』エスコアール出版部。
- 星空千手(2007)『わが家は自閉率40%—アスペルガー症候群親子は転んでもただでは起きぬ—』中央法規。
- 池田理恵子・高橋智(2009)『学齢期の高次脳機能障害児の困難・ニーズと支援に関する研究—保護者調査から—』東京学芸大学紀要(総合教育科学系)第60集。
- 岩永竜一郎(2010)『自閉症スペクトラムの子どもへの感覚・運動アプローチ入門』東京書籍。
- 岩永竜一郎・藤家寛子・ニキ・リンコ(2008)『続々自閉っ子、こういう風にできてます!自立のための身体づくり』花風社。
- 岩永竜一郎・ニキ・リンコ・藤家寛子(2009)『続々自閉っ子、こういう風にできてます!自立のための環境づくり』花風社。

泉流星(2003)『地球生まれの異星人—自閉症として、日本に生きる—』花風社。

泉流星(2008)『エイリアンの地球ライフ—おとなの高機能自閉症/アスペルガー症候群—』新潮社。

- 泉流星(2008)『僕の妻はエイリアン—「高機能自閉症」との不思議な結婚生活—』新潮社。
- ジョン・エルダー・ロビンソン(テラー幸恵訳、2009)『眼を見なさい! アスペルガーとともに生きる』東京書籍。
- カトリン・ベントリー(室崎育美訳、2008)『一緒にいてもひとり—アスペルガーの結婚がうまくいくために—』東京書籍。
- ケネス・ホール(野坂悦子訳、2001)『もつと知ってよ ぼくらのことを』東京書籍。
- 小道具モコ(2009)『あたし研究—自閉症スペクトラム～小道具モコの場合—』クリエイツかもがわ。
- 高森明(2007)『アスペルガー当事者が語る特別支援教育—スロー・ランナーのすすめ—』金子書房。
- 高森明・木下千紗子・南雲明彦・高橋今日子・片岡麻美・橙山緑・鈴木大知・アハメッド敦子(2008)『私たち、発達障害と生きてます—出会い、そして再生へ—』ぶどう社。
- 森口奈緒美(2004)『変光星—自閉の少女に見えていた世界—』花風社。
- ニキ・リンコ(2005)『俺ルール! 自閉は急に止まらない』花風社。
- ニキ・リンコ(2008)『スルーできない脳 自閉は脳の便秘です』生活書院。
- ニキ・リンコ、藤家寛子(2004)『自閉っ子、こういふ風にできてます!』花風社。
- ニキ・リンコ、仲本博子(2006)『自閉っこ、深読みしなけりゃうまくいく』花風社。
- リアン・ホリデー・ウイリー(ニキ・リンコ訳、2002)『アスペルガー的人生』花風社。
- リアン・ホリデー・ウイリー(ニキ・リンコ訳、2007)『私と娘、家族の中のアスペルガー—ほがらかにくらすための私たちのやりかた—』明石書店。
- 笹森理絵(2009)『ADHD・アスペ系ママ—へんちゃんのポジティブライフ—発達障害を個性に変えて』明石書店。
- スティーブン・ショア(森由美子訳、2004)『壁のむこうへ—自閉症の私の人生—』学習研究社。
- すぎむらなおみ・「しーとん」『発達障害チェックシートができました—がっこうのまいにちをゆらす・ずらす・つくる—』生活書院。
- 高橋紗都・高橋尚美(2008)『うわわ手帳と私のアスペルガー症候群—10歳の少女が綴る感性豊かな世界—』クリエイツかもがわ。

● 高橋智・増淵美穂(2008)アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍磨」の実態と支援に関する研究—本人へのニーズ調査から—、『東京学芸大学紀要(総合教育科学系)』第59集。

● 高橋智・生方歩未(2008)発達障害の本人調査からみた学校不適応の実態、『SNEジャーナル』第14巻1号、日本特別ニーズ教育学会。

● Satoru TAKAHASHI, Ayumi Ubukata (2009) Supports for Adjustment Problems of School-Age Youth With Developmental Disabilities: A Survey of People With Developmental Disabilities, *The Japanese Journal of Special Education, Vol.46 No.6, pp.525-543, The Japanese Association of Special Education.*

● 高橋智・生方歩未・田部絢子(2009)発達障害の学校不適応の実態と支援—発達障害の本人調査から—、『月刊生徒指導』第39巻8号、学事出版。

● 高橋智・横谷祐輔・田部絢子・石川衣紀(2009)「発達障害と不適応」問題の動向と課題、日本特別ニーズ教育学会編、『発達障害と「不適応・いじめ・被虐待」問題(SNEブックレットNo.4)』。

● 高橋智・石川衣紀・田部絢子(2011)本人調査からみた発達障害者の「身体症状(身体の不調・不具合)」の検討、『東京学芸大学紀要(総合教育科学系)』第62集。

● テンプル・グランディン、マーガレット・M.スカリアーノ(カニングハム久子訳、1994)『我、自閉症に生まれて』学習研究社。

● テンプル・グランディン(カニングハム久子訳、1997)『自閉症の才能開発—自閉症と天才をつなぐ環—』学習研究社。

● テンプル・グランディン、シヨン・バロン(門脇 陽子訳、2009)『自閉症スペクトラム障害のある人が才能をいかすための人間関係10のルール』明石書店。

● テンプル・グランディン(中尾ゆかり訳、2010)『自閉症感覚—かくれた能力を引き出す方法—』日本放送出版協会。

● トーマス・A・マッキー(ニキ・リンコ訳、2003)『クマとぼくと自閉症の仲間たち』花風社。

● 山下揺介・田部絢子・石川衣紀・上好功・至田精一・高橋智(2010)発達障害の本人調査からみた発達障害者が有するスポーツの困難—ニーズ、『東京学芸大学紀要(総合教育科学系I)』第61集。

● 横谷祐輔・田部絢子・石川衣紀・高橋智(2010)「発達障害と不適応」問題の研究動向と課題、『東京学芸大学紀要(総合教育科学系I)』第61集。

● ウェンディ・ローソン(ニキ・リンコ訳、2001)『私の障害、私の個性』花風社。

●

●